

芸術文化学部 准教授

渡邊 雅志

わたなべ・まさし

驚きや感動を与え、行動を促す
プロダクトデザインの世界

手のひら大の木製の家、その中には小さな表彰状が納まつている。木でできた懐中電灯、実は中に表彰状をまるめて収納できる。いずれも日本建築学会北陸支部主催のワークショップ「こどもたてももの探偵団」で、コンクール受賞者に贈られる記念のトロフィーだ。いつまでも思い出が共有できるようにという思いが込められた渡辺准教授の作品だ。

渡辺准教授の専門はプロダクトデザイン。生活雑貨をはじめ、家具、DMやポスター、パンフレットや本の装丁など、幅広い分野の作品を手掛ける。デザインの仕事だけでなく、

イベントやワークショップの企画にも声がかかる。「デザインには相手があり、相手と価値観が共有されてはじめて成立するものです。私の作品分野が多岐にわたるのは、そのやりとりが出来る分野であれば、どれでも答えを導き出せると考えているからです」と渡辺准教授は語る。

昨秋に富山市内の環水公園を会場に開催された「GEBUN オープンエアマニージャム」環水公園」では、来場者に「りんごの形をした絵馬」に夢を描いてもらい、園内の木につるすイベントや、公園内に設置した「幸せの鳥」を来場者に探してもらうイベントを企画した。「人々に驚きや感動を与え、行動を起こさせるまでが作品だと考えています。作品は人々にスイッチを入れる装置です」という。

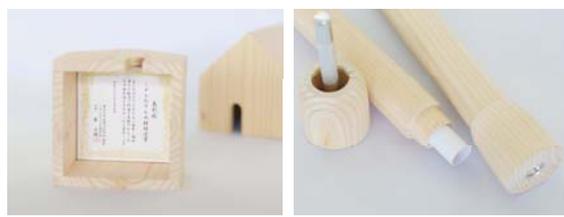
プロダクトデザインの可能性

生まれは新潟県。岐阜の高山の工房で働いた後、東北芸術工科大学助手を経て富山大学に着任した。作品の素材は実に多彩だが、木が営む建具店の工房で、木の香りを感じ、リズムのある作業の音を聞き、ものが出来上がった様子を間近で見れていたからだ。小学生の頃は、工房内で不要になった木の切れ端をもらい、釘を打ち、工房の隅で一緒に作っていたという。今でも祖父のいた工房の心地よさを

が記憶に残っている。

この頃の思い出から生まれた作品に「おじいちゃんの釘フック」がある。「無印良品」の「MUJI AWARDS」で銅賞を受賞した作品だ。「祖父は釘を無造作に柱に打ちつけて様々なものを掛けていました。それは無意識に物が落ちないように角度をつけて打ち込まれていました。私は柱に打ち込まれた釘が最も合理的なフックだと感じ、いつも決まった角度と長さで釘が固定されるように少しだけ手を加えたのです。」

何気ない日常からヒントを得て、様々な作品を生み出す渡辺准教授。「これまでの固定概念にとらわれずに、違った視点や思いから物事を見直すと、今までになかった新しいものが見えてきます」と語る。その思いのもと、便利なものがあふれる世の中で、使い手が驚きや感動を得て、価値を理解し、満足して使いたいと思えるものを追究していく。



「子どもたてももの探偵団トロフィー」(左/210、右/211)「これトロフィーなんだよ!と、人に見せて驚かせたくなる、そんなトロフィーを目指しました。それはきっと思い出とともに語られているはずですから。」



「おじいちゃんの釘フック」(2008)「打ってしまえばただの釘、でいい。」